

聖書：I サムエル 10：1～27

説教題：新しい人に変えられ

日時：2016年4月10日（夕拝）

前の9章でベニヤミン人キシユの息子サウルが初めて聖書に登場しました。その彼がいなくなった父キシユの雌ろばを捜しに旅に出た時の様子が詳しく描かれていますが、それは実はサウルをイスラエルの初代王とするための神の摂理であったことが示されました。サウルは預言者サムエルと会い、彼と食事をします。そしてついにこの10章で彼に油が注がれて、主が彼を王として立てておられるという御心が示されます。サムエルは油のつぼを取ってサウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言います。「主が、ご自身のものである民の君主として、あなたに油を注がれたではありませんか。」

聖書を見ると、預言者、大祭司、王の任職の際に、この油注ぎが行なわれたことが分かります。それはその働きをなすのに必要な賜物と力を神がさずけて下さることを象徴するものでした。サウルにとってこれは思ってもみなかったことでしょう。なぜ最も小さい部族の最もつまらない私に、サムエルはこのようなことをするのか。サムエルは続いてサウルがこの主の御心を確信できるための三つのしるしについて語っています。

その一つ目は2節にあるように、まず二人の人に会うということ。彼らは、あなたが捜している雌ロバは見つかったこと、そしてあなたの父があなたがたのことを心配していると告げると言います。二つ目は3節にあるように、今度は三人の人に会うということ。その彼らはあなたにパンを二つくれる。このパンは神にささげるためのものであって誰にでもあげるものではありません。これはサウルが言わば神の代理者のように見られ、扱われることを意味します。三つ目は5節にあるように、ギブアに着くと、琴、タンバリン、笛、立琴を鳴らす者を先頭にした預言者の一団に出会う。その時、主の霊があなたに激しく下り、あなたも彼らと一緒に預言して新しい人に変えられる。主はここにおいて、サウルが王としての務めを十分に果たすことができるために上からの賜物と力を豊かに授けて下さるのです。7節に、「このしるしがあなたに起こったら、手当たりしだいに何でもしなさい。」とされています。これは神が下さる特別な力を興味本位で試してみて良い、ということではありません。これは「あなたの手が見出したことを行なえ」という表現であり、置かれた状況の中でこうすべきだと思ふことがあったなら、

ためらわずにそれを行ないなさいということです。自分の力では到底なし得ないと思うことでも、神が共にいて下さるので、それを行なってみれば必ず成功する。やることすべてが人間の力を超えた神の力によって導かれるということです。

9～10 節には、その通りのことがその日じゅうに起こったと記されています。サウルは預言者の一団に会い、神の霊が激しく彼に下り、彼も一緒に預言を始めました。それを見た人々は驚いて、「キシユの息子はいったいどうしたのか。サウルもまた、預言者のひとりなのか」と言いました。つまりサウルを以前から知っている人たちがこのような声をあげざるを得ないほどにサウルは全く別人の姿を示したのです。神はこのように思わぬ人々にご自身の霊と力を上から注いで、新しい人として用いることができるのです。

さてサウルはこうして主の霊によって、自分はどんなに変わり得るかという体験をしましたが、その彼はもともとどんな人物であったのか、その人柄が 14 節以下に記されています。彼はまずおじに会って「どこへ行っていったのか」と聞かれますが、雌ロバのことは伝えたものの、王位の話は話しませんでした。ある人は、この王位に関する話はまだ公にされていないことだったので、サウルはまだ話すべき時ではないとわきまえていたのだらうと言います。しかし続くエピソードと合わせて考えると、仮にそれについて話して良い時期にあったとしても、彼は言わなかったのではないかと思います。サウルとしてはこんな大それたことを自分の口からは言いたくないし、自分でもまだこのことは本当には信じられない状態にあったので話そうとしなかったのではないでしょう。

17 節以降では、サムエルは全イスラエルを呼び集め、公に王を選ぶためのプロセスを踏みます。全部族からまずベニヤミンの部族がくじで取り分けられ、次にマテリの氏族が取り分けられ、そしてキシユの子サウルが取り分けられました。しかしそのサウルが見当たりません！彼はどこにいるのか？すると彼は何と荷物の間に隠れていました！何ともユーモラスな話です。彼は主ご自身によって隠れていた場所を示され、人々の真ん中に引き出されてしまいます。すると彼は背が高かったので、周りの人々より頭がポコッと上に出てしまいました。なるべく隠れたい気持ちなのに頭一つ分出てしまう。この時ばかりは身長が高いことを恨めしく思ったことでしょう。そして人々は彼の背の高

さを見て、「そうだ！この人こそ主が選ばれたふさわしい人だ！王様バンザーイ！」と
言い始めます。サウルとしては何と反応して良いやら、戸惑うばかり。ここで強調され
ているのは、サウルは王になる野心を全く持っていなかった人であるということです。
イスラエルには間もなく王が誕生するという機運が高まっていたでしょうから、我こそ
はその地位に！との望みを持つ人も少なからずいたことでしょう。しかしサウルはその
ような人ではなかった。神はそういう人ではなく、むしろ尻込みするような人、自分か
らはそのことを望んでいないような人を用いるのです。神は人間の思いとは異なる人
を用意し、ただご自身の恵みで満たし、天からの力を注いで、ご自身の器として用いて行
かれるのです。

最後の 26～27 節を見ると、神に心を動かされた者たちは、サウルを認め、彼につい
て行った一方、イスラエルの中には、彼を認めなかった者たちもいたことが記されてい
ます。「どうしてこの者に我々を救えよう。」と言ってサウルを軽蔑し、贈り物を持って
来なかった。実にそう言われるような彼だったのです。しかしサウルは黙っていました。
このような言葉を浴びせられることは誰しも面白くないところでしょうが、怒って反応
せず、言わせておく。それでいいのです。確かに自分にイスラエルを救う力はない。そ
んな自分に救う働きができるとすれば、それはただ神の恵みと力によることです。サウ
ルはその主に信頼する歩みへ進むことによって主の器とされた自分であることを証し
して行けば良いのです。そして彼らの中傷が正しくないことを証明して行けば良いので
す。

以上のサムエル記 10 章から、私たちは自分たちにどう適用したら良いでしょうか。
まず学ぶことは、神は私たちに働きを与えるだけでなく、それをなすために必要な賜物
や力も与えてくださるということです。サウルはただ王位を与えられただけでなく、そ
の働きをするために必要な神の霊の油注ぎも受けました。それによって新しい人に変え
られました。私たちもそれぞれ色々な働き、役割、使命を神から与えられています。教
会の奉仕ばかりではなく、家庭において、地域において、職場において、学校において
そうです。そしてそれらすべては神のための働きです。「あなたがたは食べるにも、飲
むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい」と言われています。し
かしその働きを遂行するにあたって、私たちは自分の力の無さを痛感するかもしれませ
ん。大きな課題を前にして尻込みするかもしれません。しかしもし神がその働きを私に

与えてくださったのなら、それをなすための力も神が与えてくださるのです。神の霊を上から注いで強くしてくださり、私をも新しい人としてくださるのです。私たちはまずこの神を見上げたいと思います。私は私の人間的な力で主が召してくださった働きをするわけではありません。上からの力を着せられ、主の霊で強くされて、この働きを遂行することができるように、御心にかなう奉仕をささげられるように、神に祈り求めて、召されている働きに当たりたいと思います。

しかしこれと合わせて今日の箇所から心に留めたいことは、この神の霊の働きは御言葉に従う歩みとセットで考えられなければならないということです。サウルは7節で「手当たりしだい、何でもしなさい。」と言われましたが、それは決して無制限ではないことが、次の8節に示されています。神の霊によって何でもして良いという自由を与えられたサウルが、同時に預言者サムエルの御言葉に聞き従う者でなければならないと言われています。時々、聖霊の働きを強調する人々の中には、みことばを軽んじる人がいます。みことばを学び、みことばにこだわるあり方は文字の宗教であって、聖霊の働きはそれとは次元の違うことであるかのように言う人たちがいます。しかしここに示されていることは、神の霊に導かれる人はみことばに聞く人でなければならないということです。実際、この8節のサムエルの言葉は今後カギになる言葉です。サウルはこの10章で主の霊の注ぎを受けましたが、後にこのサムエルの言葉に正しく従いません。その彼はやがてこの王位を取り上げられてしまうのです。それは他でもない、この預言者の言葉に聞き従うという歩みを彼がおろそかにし、これを破ってしまうからなのです。

後半の25節も同じです。サムエルは「王の責任」を民に告げ、それを文書に記して、主の前に納めました。これは王はどのように振る舞わなければならないか、みことばに沿って規定した内容を指していると思われます。すなわちサウルは主の霊の油注ぎを受けたからと言って、あとは自分の思うがままに治めて良い絶対君主ではなく、あくまで神の言葉に従って治める立憲君主であるということです。このみことばに聞き従うというある種の制約・枠組みの中でこそ、彼は主の霊の働きを豊かに体験し、その霊の力によって良き奉仕をささげることができるのです。

私たちは知らない場所に初めて行く時には、地図を参照します。どうやってその目的地に到達すべきか、道順を確かめます。ただ自分の勘に頼って行くことをしません。地

図はそのような仕方、ある意味では私たちの行動を制限します。気ままに、思うがままに進むのではなく、この道を行くように、他の道は行かないように、と私たちに示すからです。しかし実はこれに従う時に、私たちはより良い自由を味わいます。それはさ迷ってしまっとうしようもない状態に陥ることから守られる自由であり、良く分からない状態に陥って感情的にイライラしてしまうことからの自由であり、あるいは時間を無駄に使ってしまうことからの自由です。自動車についている便利なナビもそうでしょう。次の交差点を左に曲がれとか、大きく迂回して左折した後、斜め右などと難しい注文も付けて来ます。ある意味で私たちの自由を制限する指令を出して来るのです。しかしそれに従うところに実は真の自由があります。もちろん時々、自動車のナビは正しくない指示を出すことがあります。教会車のナビもどういふわけか環七の転回禁止の場所で「ここで転回です！」と指示を出してくるので最初はあわてました。ですからその指示に従わない方が良いという場合もあり得ます。しかし聖書はそうではありません。私たちは神の御言葉に聞き従う中でこそ自由を味わうのです。御言葉から離れるところには真の自由はないのです。そしてそこでは聖霊による豊かな導きを経験することもできないのです。

ですから私たちはこの両者を大切なこととして考えたいと思います。一つには御言葉に聞き従うことを大事なこととする。この神によって定められた枠組みこそ私の歩みを安全に守り、また神の祝福の内に守ってくれるものです。そしてもう一つはその中で神の霊の導きを祈り求めることです。上からの力を豊かに注がれ、神の霊の力で満たされて、奉仕に当たることです。そのようにして私たちも人間の思いを超えた力によって強くされ、新しい人とさせられ、神が与えてくださった働きを神の力で全うする者へ、そしてその神にすべての栄光と賛美を帰す歩みへ導かれたいと思います。